

チーム医療

専門性発揮しつつ連携

医師だけでなくさまざまな職種が、各自の専門性を発揮しながら連携を図る「チーム医療」が広がっている。治療やケアが複雑化、高度化する中で、医師にすべてを任せるのではなく、情報を共有しながら多くのスタッフがかわり、患者の安心につながるようとしている。

1月下旬、広島大病院の9階東病棟。午前8時半すぎ、乳がん患者の病室を9人の医療スタッフが回診し始めた。教授を先頭に、医師らが続く。大学の回診のイメージとは様子が違っ。病棟や外来の看護師、薬剤師、リハビリを担当する作業療法士も加わった。週に1度の「チーム回診」だ。

誰のためか

「眠れましたか?」「焦らなくて、ゆっくりしてたらいいよ」

多職種参加で回診 情報共有、すぐに対応

3日前に乳房の摘出手術を受けた50代のAさんに、乳癌外科の村上茂講師らが次々と話し掛ける。スタッフは回診前の打ち合わせで、対象者全員の容体や治療計画を把握している。

「誰が、誰のために、何のために回診をするのかを考えたらこうなった」とチームをつくらせた村上さん。統一し、すぐに対応できるように回診することで、患者が何を求め自分たちは何をすべきか、その場で意思を共有する。Aさんも「いろんな方々

院と比べると、同がんセンターの医師や看護師の数は6〜7倍、薬剤師は70倍、総収入も10倍以上。「スタッフの数や資金力はともまねできないが、職種を超えて互いに信頼し、意見を出し合うコミュニケーションの実践なら日本でもできる。こう考え、帰国後にスタッフに声をかけた」

「一緒に」を実感

2人目の子供の授乳中に乳房のしこりに気づき乳がんと診断され、1週間前に手術を受けた30代のBさん。胸の骨と筋肉を切ったため安静期間が通常より長く、リハビリの遅れを気にしている。

ミーティング

こうして始まったのが月に1回の「プレストチームミーティング」。入院患者のケアに直接かかわるメンバーに加え、腫瘍(しゅもう)内科の医師や外来化学療法室のスタッフ、放射線技師も参加。問題点や解

「この方とリハビリを頑張らなくちゃ」と安心できた。村上先生と金山さんが自分の前で話しているのを見ると、一緒にやってくれていると実感できます」とBさん。村上さんは「桜が咲くころにはお子さんの抱っこもOKだよ」と声を掛けた。Bさんの笑顔に、メンバーの顔もほころんだ。



乳がん手術後の入院患者を、多職種のチームで回診する広島大病院の村上茂・乳癌外科講師(左から2人目)ら＝広島市の同病院

特編

医療新世紀

(共同＝江頭建彦)

市立堺病院薬剤・技術部長 阿南節子さんに聞く



「命は預けます」といった従来の態度では対応できない。病気に立ち向かう姿勢を応援するには、角度から患者を支えらるる。阿南節子さんは「チーム医療の形が違っても、患者へのケアは変わらない。アプローチや情報提供は、副作用の脱毛はがきなど、患者が不安を抱えたりするのを避ける。科学的根拠に基づいた医療をスタッフが熟知していることが大前提。共通の認識を持ち、同じ目標に向かって互いに切磋琢磨(せつたくま)することが重要。それぞれの分野の専門家として自由にもがき、一人一人がリーダーになれることが理想だ。医師が真ん中ではなく、医師もほかの職種も『メディカルスタッフ』として、真ん中にいる患者を支えるべきではないか」(共同＝江頭建彦)

真ん中の患者を支える

がんの外来化学療法や緩和ケア、感染症の治療などで多職種が参加するチーム医療が行っている。市立堺病院(大阪府)の阿南節子薬剤・技術部長に、チーム医療の意義や展望を聞いた。

▼チーム医療が求められる背景は、

「複雑化する医療を医師だけで担うのは無理。正しいかを違つて見てもらえ」と理解が少し

「2000年代末から、入院患者の服薬指導の1部を薬剤師が担当し、医師が担っていた時と比べると、後で感謝されたケースも見た。昔なら『先生に聞きましよう』だった

専門職団体が協議会 互い知り、役割アピール

医療機関でチーム医療

おり、患者会なども加わり、さまざまな専門職を担うさまざまな専門職の団体が「チーム医療推進協議会」を設立した。専門職の団体数は13(「ピスト」、医療機器を扱互いの役割や仕事の内容。困り事や悩みを「臨床工学技士」などを知り、広くアピールし、みん解決に当たる「医療看護師や薬剤師に比べなっていくことを目的にしてソーシャルワーカーや、じみが薄く職種も参加している。

関係者に設立を促したシャナリストの福原麻希さんは「チーム医療」という言葉は使われるようになったが、患者は誰がメンバーなのか分からず、相談できずに困っている。医療側もお互いを知らない、横のつながりが足りず、啓発する重要性を訴える。

協議会代表の北村善明・日本放射線技師会会長は「現場は過剰労働などの問題も抱えており、効果的なチーム医療を行うための体制整備を国などに求めていきたい。医療の進歩に対応した教育水準の引き上げなども課題だ」と話している。



「チーム医療推進協議会」が開いたシンポジウム11月30日、横浜市鶴見区の鶴見大学会館

重要さ増す看護師、薬剤師

広島大病院の乳がんのチーム医療は、入院患者だけが対象ではない。病状や手術、薬の副作用への不安・悩みなどを細かくサポートしていく上で、外来でも看護師や薬剤師ら医師以外のスタッフの重要さは増している。

外科外来の一角にある「看護相談室」。診察を終えた患者の多くが一度はここを訪れる。相談を担当するのは、チームのメンバーでもある外来の看護師だ。

その一人、山口真由美さんは「医師は診察時にはなかなか十分な時間がとれない。ここならゆっくりといろいろな話ができる」と話す。

人工乳房やかたつの相談をしたり、さまざまな悩みを打ち明けたり。時には、乳房を温存する治療と全摘手術のどちらを選択すべきかといった質問も出るが、「私が答えを出すのではなく、なぜそのこと